

ジュニア部門 〈母への思いに関する作文〉

中高校生部門 優秀賞

母へのおもい

白山市立美川中学校

米^{よね} 澤^{さわ} 咲^さ 紀^きさん

〔応募動機及びコメント〕

今回、この賞をいただくことができ、嬉しく思っています。ありがとうございます。ありがとうございました。

この作文を書いて改めて母の大切さと知りました。そして、自分自身の中でけじめがつかまりました。これから先、母を大切にしていきたいし、精一杯支えていけるようになりたいと思います。

私の母は、看護師だ。毎日、私たちのために働いている。日勤のときは、朝に家を出て、夜に帰ってくる。また、夜勤のときは、その日の昼から仮眠をとり、夕方には家を出て、次の日の昼頃には帰っている。朝にないから、なんだか寂しい。毎日ちがうスケジュールだから、体を壊さないのか、と思う。でも母は、疲れた顔を見せない。「疲れた。」という言葉は、多分、きいたことがない。

二ヶ月前、父が亡くなった。ガンだった。見つかったころにはもう手遅れだったらしい。最初にきいたとき、私は、なかなかその事実を受け入れることができなかった。それでも、月日は流れていった。父が、日に日に衰弱していくのが分かった。今年の五月頃、父は、

「夏休み、越せるかな。」

と話していた。そのとき、私は、とても悲しくなった。父に何もしてあげられない自分が、情けなかった。亡くなる二週間前まで、買い物に連れて行ってくれた。家に帰ると、私がほしがっていたものが買っていた。本当は、とても辛かったはずなのに。あのときに、あんな言葉を言わなければよかった、と、たくさん後悔した。父が入院したとき、母は仕事を休み、ずっと父のところに行った。食事をとるために家に帰って、私たちの様子も心配してくれた。祖母と交代で、父の世話をしていた。

翌日くらいに、母が

「話せるの最後かもしれないし、パパんとこ行こう。」

と言われて、病院に連れて行かれた。病室に入った瞬間、涙がこみ上げてきた。こんなに、泣き虫じゃなかったはずなのに。父は、家にいたときとちがって、ベッドでぐったりと横たわっていた。本当に、話せるのはこれで最後だと思われた。なのに、私は、ほとんど話すことができなかった。祖父が亡くなったときも、そうだった。なんて私は最低なんだろう。自分を責めた。

私は、父のことが大好きだった。本当に大好きだった。だから、父が亡くなったときは、なんとも言えない気持ちだった。なぜ父が病気になるなければいけなかったのかと、病気を恨んだり、もっと話したかった、ききたいことがたくさんあったのにと、後悔ばかりが浮かんできた。励ましてくれる家族や友達の話が、辛かった。亡くなって時間が経っても、父はまだどこかで生きている感じがした。心に開いた穴が埋まらな

かった。父がいなくなるだけで、一人ぼっちになったみたいに寂しかった。

母は、通夜でも、葬式でも、涙一つ見せなかった。それとも、私が見なかつただけなのだろうか。父と似ていた。父は、亡くなるときまで、「つらい」や「苦しい」といった弱音を吐かなかつたらしい。私は、それに尊敬できた。今までの自分に、腹が立った。少しのことで、すぐ弱音を吐く。こんな自分は、いけないと思った。いつまでも甘えたり、泣いていたりしてはいけないと思った。

家族が五人になった今、母は一生懸命に働いている。祖母も働いている。祖母は最近、

「疲れたー。」

と言うようになった。私は、何も気を遣うことができていない。だから、しっかり助けてあげられるように努力したいと思った。

祖母の母は、三歳のときに亡くなったのだという。祖母に、

「お父さんより、お母さんがおらん方が、大変なんやよ。」

と話された。確かに、そうだと思った。このとき、母の大切さを、改めて知った。この前、書道の先生にも、声をかけられた。

「先生のお母さんも、七歳のとき亡くなったんや。でも、この通りたくましく生きとるんやから、さきちゃんも頑張らんなん。」

と、笑顔で話してくれた。祖母の言葉と、先生の言葉に、勇気づけられた。震災によって両親を亡くした、という人もたくさんいるだろう。一人になってしまった人もいるだろう。父がいなくても、母がいるだけ贅沢だ、と私は考えた。

父が亡くなってから、親戚から

「お母さんを支えてあげてね。」

と、何度も言われた気がする。私は、ちゃんと母のことを支えていけるのか、不安だった。逆に、今は私が母に支えられている。いつも、迷惑ばかりかけている。だから、甘えてばかりでなくて、しっかりと母と家族を支えていけるようになりたい。そして、父と祖父のときのように、悔いの残らないように過ごしていきたい。いつも、感謝の言葉はなんだか恥ずかしくて言えないけど、

「ママ、いつもありがとう。」